

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

コミュニケーションに失敗しないだけでなく、読み手が「この人は頭がいい」と感じ入る知的な文章を書くにはどうすればいいでしょうか。読ませる文章の条件は2つ。「論理性」と「リアリティー」です。**A** 論理性から説明しましょう。論理的な文章を書くには、型を身につけることが近道です。型はいろいろありますが、おすすめは「頭括型」「尾括型」「4部構成」。これらの型に当てはめて構成すると、論理的に破綻のない文章を書けます。

頭括型は、最初に結論を書いて、その後に根拠を示し、ディテールを掘り下げる型です。私の経験上、フランスの頭のいい人は、たいてい頭括型で話します。学校でそのように教えているのか、まず結論を話して、「理由は3つあります」と続けるのです。

3つはちょうどいい数だと思います。1つや2つでは説得力が足りません。かといって5つ6つと並んでいると、相手が消化するのに時間がかかって混乱を招きやすい。3つなら過不足ないでしょう。

①尾括型は、最初に根拠や経緯を並べて、最後に結論をまとめる型です。

一般的にビジネス文書は結論を最初に持つてくるべきで、言いたいことが最後までわからない尾括型は不適当と言われています。**B** それでも場面しだいです。たとえば緊急事態をのぞき、悪い報告をするときは、まず状況説明から始め、相手に心の準備をさせてから結論を伝えたほうがいいかもしれません。^{（注3）} ケース・バイ・ケースで使い分けてください。

頭括型、尾括型は、メールやペラ一枚の報告書など比較的短い文章向きであるのに対して、長い文章向きなのが4部構成です。

4部構成は、第1パートで頭括型と同じように結論を提示します。第2パートで、その結論に対して想定される②疑問や反対意見を提示。続く第3パートで疑問や反対意見に回答・再反論して強い根拠を示し、第4パートでふたたび結論に③着地させます。

④肝は「たしかにそういう意見もあるだろう。しかし、それにはこう反論できる」という形で示される第2、第3パートです。ここはまさに読み手との対話部分。第2パートで読み手の反論を先回りして拾い、第3パートでその反論を潰すことで、説得力の高い文章になります。

頭のいい人の文章は複数の読み手を想定すると言いましたが、それは複数の角度からの「たしかに」。しかし「で自分の説を検証することができるからです。

一方、頭の悪い人の文章は読み手を想定しないので、「たしかに」。しかし「の部分がないことがほとんどです。なんとか4部構成にハマようと意図しているものの、うまく使いきなせていないケースもよく見かけます。たとえば「しかし」の根拠が薄弱で、「たしかに」の説得力がかえって増していたり、「しかし」で示した再反論に対して「しかし」と続けて再々反論してしまい、意見がぐるぐる回っていたりする。X型を知っているだけではダメで、使いこなしてこそ論理的な文章になります。

いい文章のもう一つの条件である「リアリティー」も重要です。

C 「我が社の創立記念パーティーに大勢の人がつめかけた」という文章を読んで素直に信じられるでしょうか。「大勢」では具体性がないため、どこか嘘っぽさを感じる人が多いのではないのでしょうか。

盛況だったことを伝えたいなら、「座る席がなく、20人くらいが立っていた」「駐車場に車が入りきらなかった。列を待つ中にはナンバ

ー・プレートが九州の車もあった」と具体的に書いたほうが伝わります。

リアリティーを出すポイントは、「固有名詞」「色」「動き」です。「車が停まっていた」よりも、「黒いベンツが後ろから自分を追い抜いて目の前で止まった」と書いたほうが映像的で、読み手の印象に残ります。

実はY頭のいいはずの人も、リアリティーに欠ける文章を書くことが少なくありません。今から約50年前の話になりますが、高校の地学の先生が授業で⑤戦争体験を話してくれました。先生は南方のどこかの島に出征して、命からがら日本に逃げ帰ってきたとか。経験者だからこそ語れる迫真性に満ちていて、⑥興味深く聞いたことを覚えています。

ところが、後日その先生が自分の戦争体験をまとめた本が期待外れでした。授業で話したときにはリアリティーがあったのですが、文章化する際に細部が削られ、教科書のような硬い文章になっていたのです。

先生はファクトを重視したのでしょう。^{（注5）} 「どこで何人が死んだ」といった数字は記述されていました。しかし、ファクトだからといってリアリティーがあるとは限りません。無機質な数字からは、苦しさやひもじさは伝わってきません。授業で披露してくれたように、死んだネズミを取り合ってケンカになったエピソードを書いてくれたほうが、読む人の心をとらえたと思います。

数字などのデータがあるのに越したことはありませんし、特にビジネスの文章では、データの裏付けは必須です。しかし、データばかりで構成された文章は、頭に入ってこない。必要なものに絞って使うべきです。

（樋口裕一『今日から使える、頭がいい文章の「3つの型」』による）

（注1）破綻——物事が行きづまり、うまく行かなくなること。

（注2）ディテール——全体部分から見た細かい部分のこと。

（注3）ケース・バイ・ケース——場面によって対応を変えていくこと。

（注4）迫真性——表現されたものの本物らしさ。

（注5）ファクト——事実。

問1

A	→	C
---	---	---

 にあてはまる言葉を、次のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ言葉は二度使えない。)

ア なげなら イ そのうえ ウ たえば エ まずは オ ただ

問2 線部①「尾括型は、最初に根拠や経緯を並べて、最後に結論をまとめる型です。」の文の主語と述語の関係として最もふさわしいものを、次のア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何(だれ)が――何だ。
イ 何(だれ)が――どうする。
ウ 何(だれ)が――どんなだ。

問3 線部②「疑問」の対義語(反対の意味の言葉)として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 問題 イ 反応 ウ 確信 エ 質問

問4 線部③「着地」、⑤「戦争」と同じ構成の熟語を、次のア～オから一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 受賞 イ 頭痛 ウ 親友 エ 絵画 オ 苦楽

問5 線部④「肝」のここでの意味として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 内臓の一部。
イ 重要な部分。
ウ 気力。
エ 力強さ。

問6 線部⑥「興味」の同義語(似た意味の言葉)として最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 想像 イ 感想 ウ 表現 エ 関心

問7 線部X「型を知っているだけではダメで、使いこなしてこそ論理的な文章になります」とありますが、論理的な文章とはどのようなにしてできあがるものだと筆者は考えていますか。次のように説明するとき、「 」に入る言葉を、「想定」、「検証」という言葉を使って、三十字以内で答えなさい。

・文章の型を知った上で、「 」という作業をおこなってできあがるもの。

問8 線部Y「頭のいいはずの人も、リアリティーに欠ける文章を書く」とありますが、このことに関する筆者の体験について次のようにまとめるとき、「 」に入る言葉を本文中から十一字でぬき出して答えなさい。

・筆者が先生から聞いた迫真の戦争体験が、文章になると、「 」になってしまっていたことがあった。

問9 本文の内容と合っているものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 文章を書くためにはリアリティーが必要だが、場面によってはそのリアリティーが表現の邪魔になることがある。
イ リアリティーがあることで嘘っぽさを感じられるので、文章の流れに合った内容を創作する能力が必要になる。
ウ 結論を先に書く頭括型であれば、だれでも文章が破綻せず自然と論理的に相手を説得できる文章を書くことができる。
エ 文章で相手を納得させるためにデータを使うことは重要だが、データを盛りこみ過ぎると印象に残りづらくなる。

二

次の各問いに答えなさい。

問1 次の――線部の漢字の読みをひらがなで書き、カタカナは漢字に直しなさい。

① 水の流れが激しい。 ② 故郷に帰る。
③ 簡易ベッドを使う。 ④ 馬がアバれる。
⑤ サトウを使った料理。 ⑥ 難しいハンダンをする。

問2 次の①～⑥の□にあてはまる漢字を、後の漢字群から一つずつ選んで答えなさい。

① 寝耳に□ ② 二階から□菓
③ 後ろ□をさす ④ □に衣着せぬ
⑤ 船頭多くして船□に上る ⑥ □橋をたたいて渡る

漢字群

山 ・ 齒 ・ 石 ・ 水 ・ 目 ・ 指